

日本史・日本文学等、縦組史・資料を素材とすることから論文も縦組で書かねばならない分野⁽¹⁾にとって、従来、コンピュータでの論文執筆には様々な障碍があった。特に前近代文献の場合、独特の「割註」などは、通常のワープロソフトでの再現が難しいものである⁽³⁾。そこで登場するのが $\text{\LaTeX} 2_{\epsilon}$ である。たとえば「割註」の場合、`kanten2e.sty`という優れたスタイル・ファイル⁽⁴⁾によっていとも簡単に実現できる。

しかし日本語 $\text{\LaTeX} 2_{\epsilon}$ はその組版能力においてはワープロなど及びもつかぬ柔軟性を有するものの、基本的にJIS 0218の範囲内の文字しか扱えないことが、数多くの漢字を必要とする古典籍の記述にとつてはネックとなっていた。それを補うため、JIS X 0212補助漢字を利用する方法なども開拓されてきたものの、これはあくまで「つなぎ」のものであり、フォント環境のユニコードへの移行が決定的となった状況において、日本語 $\text{\LaTeX} 2_{\epsilon}$ 環境から膨大なグリフ数を誇るユニコード・フォントに簡単にアクセスできるようにする方法は、強く求められるものであったといえよう。そういった状況のなか、`ums.sty`⁽⁸⁾およびそのクロスプロットフォーム化⁽⁹⁾を経て、それらの改良のうゑに登場したのが`utl.sty`である。齋藤修三郎氏によって作成されたこのパッケージでは、`ums.sty`を引き継いでユニコード番号でグリフを呼び出せるのみならず、AdobeJapan 1-5のCIDコード⁽¹⁰⁾による指定を用い、ユニコードではアクセスできぬグリフまでもフルに利用できるようになった⁽¹¹⁾。これにより、たとえば旧来の規格では「機種依存文字」であった丸囲み数字等が、`\UTF{2460}`といったコマンドでプラットフォームを選ばず簡単に①のように表示できるようになった。さらに現在、この`utl.sty`の機能をさらに容易に利用するための様々なマクロ集が作成の途上にあり、その可能性は極めて大きく開かれているといえるだろう。かくいうこの文章も、注番号の表示に`utl.sty`およびそのマクロによる詰数字自動処理機能を利用することによって、従来のものにくらべ格段に美しい組版を実現できているものと思う。

- (1) ただし「歴史学」という括りで西洋・東洋史と混在の学術誌の場合、日本史であっても横組が「強要」されることもある。
- (2) 近代文献であっても、史料における「見せ消し」等の再現が困難であることは変わらない。
- (3) 「組文字」機能を使えば原理的には実現できないこともないが、長い「割註」の場合途方もない作業が要求され、現実的ではないだろう。
- (4) 大阪大学の金水敏氏によって提供されている。
- (5) 一応私も、そのType1フォントを配布している。
- (6) たとえば、文字選定が「場当たり」的であるとして、規格そのものが低く評価されることも多いようである。
- (7) 将来的には、ユニコードに基礎を置いた多言語TeX環境であるOmegaへの移行が考えられるものの、これまで日本語 $\text{\LaTeX} 2_{\epsilon}$ で蓄積されてきた様々なツールの移植は容易ではないため、直ちに移行することは困難だろう。
- (8) 稲垣淳氏による。
- (9) 角藤亮氏が作成されたヴァーチャル・フォントによる恩恵が大きい。
- (10) MacOSXの場合、標準でバンドルされているヒラギノ・フォントを利用することで、その機能を完全に利用できる。また、他の環境にあっても、AcrobatReaderのフォント・パック(小塚明朝)をインストールすることで、その殆どの機能の恩恵に与ることが可能だ。
- (11) これについては、齋藤氏とともに井上浩一氏の尽力が大きいといえよう。